

ホールランゲージによる英字新聞の 効果的利用についての一考察

師子鹿 元 美

The “Whole Language” Approach in Reading
English Newspapers

Motomi SHISHIKA

1. はじめに

子供の頃、お話を読んだり、親に読み聞かせてもらったりすることが大好きだったと言う人は多くいるであろう。好きだったお話が外国の翻訳物だったので、外国語に興味を持ったという学生もいるであろう。しかし、読むという楽しいはずの活動が、中学、高校と進むうちに、楽しみで読むという時間が少なくなり、まして英語で読むということは授業の中の苦痛を伴う活動でしかなくなってくる。英語を専攻している学生でも、リーディングよりはスピーキング、リスニングが好きだという学生が圧倒的に多いのが現状である。

中学、高校の英語の授業が次第に発信型へ転換を図っていることを考えれば、学生のスピーキング志向も無理もないといえるだろう。しかし英語を外国語として学ぶ学生たちに、より効果的に発信するためには、英語で読むという活動も大事であることを認識させ、同時に読むことと話すことが統合された学習がなされることが大事だと考える。ここではホールランゲージが提唱する、統合的語学学習の一つの教材として、新聞英語の有効性について考えてみたい。

2. 英字新聞の英語教材としての妥当性

大学・短大では早くから「時事英語」の授業などで、英字新聞や英文雑誌から抜粋された記事がテキストとして使用されてきているが、最近高校等においてもその有効性が認められているようだ。それは新聞の記事の内容が豊富であり、英字新聞の英語が易しく書きかえられたり、作られたものでなく、まさに「本物」であり authentic な英語教材を提供してくれるからであろう。Sanderson (1999) は新聞英語を教室で使う意義について述べており、それらをまとめるとつぎのようになる。

- ・ 一般的教育価値がある

私たちは常に世界中で起きていることについての情報を新聞から得ることができ、それらを通して世界についての知識や理解を深める。

- ・ 文化的情報源である

言葉と文化は複雑に絡み合っており、新聞はその言葉を通して文化を反映しているといえる。その地域の文化は、人々、場所、習慣などすべてのものとの関連で言葉の中に染み込んでいる。深い意味では、価値観、信条、感情、態度などが言葉に反映されている。そのような、計り知れないほどの情報源である新聞を深く読むことで、学生の

社会文化的な考え方が育つ。

- ・読者に興味を起こさせる

莫大な種類の主題が新聞では取り扱われており、どの読者にも何かしらの興味を起こさせる。特に新聞では現実に起こっている出来事を読むことで、世界やそこに住む人々についての関心が高まる。

- ・楽しむために読める
- ・本物 (authentic) の教材である

新聞は本物の読解材料の宝庫であり、教室内で新聞英語に学生が触れ、それを読み理解する力をつければ、学生の将来のキャリア形成にも役立つ。

学習者の読解プロセスについて、Goodman (1986) と Smith (1988) は「読み手とテキストとの相互作用が読みを可能にする」としており、読み手がテキストについてどんな知識を持っているか、すなわち背景知識の有無が読解に深く関係していると言える。日々、世界についての知識や情報を得られる英字新聞は、読み手のさまざまな背景知識を深めていくための有効な手段のひとつだと言えるであろう。林 (2000) は「人間のあらゆる知識はユニットになっているが、これらのユニットがスキーマである」(According to schema theories, all knowledge is packed into units. These units are schemata.) と Rumelhart のスキーマの定義を紹介している。

Carrell & Eisterhold (1983) は「スキーマ理論によれば、テキストを理解するということは、読み手の背景知識とテキストとの相互作用を意味する」と述べており、読み手の背景知識、すなわちスキーマを活性化させることが読解において重要であることがわかる。pre-reading活動においてスキーマを活性化させることの重要性は、多くの研究者が指摘しているところであるが、林 (2000) はスキーマの活性化のために、英字新聞を活用する事例を紹介している。その中で、英字新聞の記事のタイトル、写真、内容にざっと目を通させたあと、用意した質問に答えさせるという活動を通して、

「すでに (生徒) が持っている (ニュースに関する) スキーマを活用することにより、新聞記事のおおまかな内容が予測できることを学習する」としている。

また速読指導、多読指導のなかで英字新聞を利用することも考えられる。山本 (2000) は英字新聞のテレビ番組欄や不動産広告欄、求人広告欄などを使った実践例や、朝日新聞と Asahi Evening News の天声人語欄を併用した実践例を紹介している。最初の実践例では、答えとなる情報を探しながらかつ読むという scanning (情報検索読み、探し読み) (山本) の練習も行うことになる。

新聞の計り知れないほどの情報量と内容の豊富さを考えれば、さまざまな新聞の活用例が考えられるであろうが、それと同時に利用するにあたって、問題となる点、注意しなければならない点もあるであろう。Sanderson (1999) は中級まで達していない学習者にも新聞英語を読ませるべきだとした上で、学生がどれほどそれを読みたいと思っているか (motivation) が重要な要因であり、難しいと思われるものでも学生にチャレンジさせるべきであるといっている。また、中級まで達していない学生に新聞英語を読ませる際には (1) 読む前にさまざまな活動を通して、使おうとする読解材料に学生を慣れさせておく、(2) 学生にあった読解材料を慎重に選ぶこと、(3) どう学生に読ませていくかを綿密に計画すること、などが重要であるといっている。

3. ホールランゲージアプローチからみた新聞英語利用

ホールランゲージは草の根運動的に発展してきた教育理念であり、心理学や哲学、言語学などさまざまな学問分野の成果を取り入れ、それを特に言語教育の理論・実践に生かしてきている。豊かな言語環境の中で、子どもは意味のある、目的を持った言語活動を行うことで言葉を自然に学んでいくと考えられている。Freeman & Freeman (1992) がホールランゲージの原

則としてあげている次の5つは、ホールランゲージ、また第2言語習得におけるホールランゲージを理解するために役に立つと思われる。

1. 学習は「全体」から「部分」へと進む
2. 授業は学習者中心に組み立てられるべきである
3. 授業は学習者にとって今意味があり、目的を持っているべきである
4. 学習はグループとして意味のある社会的なinteractionの中で行われる。
5. 第2言語学習においては、話し言葉と書き言葉は同時に習得される。

ホールランゲージにおいては、その名前が示すように言葉を「全体」で丸ごと学ぶことが大事だとしている。人と人が触れ合うなかで学習は本来進んでいくものであるから、リーディング、ライティング、リスニング、スピーキングがそれぞれ孤立するのではなく、すべてが統合された形で行われるのが自然であると考えられる。

Goodman (1986) は「ホールランゲージの理論は、学習理論、言語理論、教師と教師の役割についての考え方、言語中心のカリキュラムの4つの科学的人間主義的支柱にささえられている」とのべている。学習理論について、個人的にまた社会的に何らかの必要があつて初めて、子供は呼んだり書いたりする力をつけていくとしている。Goodmanは主に英語を母国語として学ぶ学習者について研究、実践を行っているが、彼の提唱するホールランゲージの理論は、英語を外国語として学ぶ日本人の学習者にも当てはまると考えられる。

英字新聞はそれ自体豊富な内容を持っており、豊かな言語環境を提供しているといえる。英字新聞では日々私たちの周囲で起こっていることが情報として与えられ、学生はそれを読むことで社会と深く関わっていくことになる。社会との関わりをなかで言葉を学んでいくことになる。学生たちが興味を覚えるような教材を選択することが重要になってくるであろうし、それを学生たちにとって意味のある (meaningful)、

学生たちが何らかの目的を持って行う (purposeful) 活動のなかで、どう必要性を持たせておこなわせるかも大事なポイントである。

4. 具体的授業実践

短大1年生のリーディングの授業で行った英字新聞を使った実践例を紹介する。学習者の読解力のレベルはさまざまであるが、ほとんどの学習者がこれまでに英字新聞からの記事を読んだ経験を持っていないようである。読解レベルは平均すればpre-intermediateぐらいであると考えられる。導入として、ヘッドライン、リードパラグラフ、本文の3つから英字新聞の記事は構成されていること、ヘッドラインの構成などを説明しておく。

(1) 写真、ヘッドライン、本文に関連させた活動

過去1週間くらいの記事から学習者が知っていて、興味を持ちそうだと思う写真のついた記事を8~10ほど用意する。多くの学生は英字新聞はむずかしいという先入観を持っているので、初めて英字新聞を授業で使う場合、誰もが知っている事件、出来事などの記事を使うことが効果的だと思われる。選んだ8~10の記事の写真の部分だけを切り取り、1枚の紙に張り、そのコピーを学生に渡す。

まず写真からその記事の内容を推測させる。写真から記事の内容がすぐ分かるものと、かなり推測が難しいものを織り交ぜていたが、学習者は思い思いに推測したものをスタディーシートに書いていたようだ。推測がむずかしいと、わからないと言って、投げ出してしまう学生がいるので、とにかく何でも良いから思ったことを書いておくように指示する。この段階では何らかの推測をさせることが、スキーマの活性化につながると考える。

次にその写真のヘッドラインだけを書き出した紙を渡し、どの写真とどのヘッドラインが結びつくかを考えさせる。知っている固有名詞、名詞、動詞などをたよりにかなりの程度正確に

写真とヘッドラインを結び付けることができた。ここまでの段階では特に辞書を使わず、分からない単語もその意味は推測させる。

次に、それぞれの記事の4～5パラグラフ分を切り取ったもののコピーを学生に渡し、それぞれの記事の写真とヘッドラインの内容を探させる。特に、記事の内容の要約部分であるリードパラグラフを中心にscanningをするよう指示する。これまでの活動はすべて2人ずつのペアで行わせる。最後にそれぞれの記事の要約を日本語で書かせる。

この活動は、ライティング、スピーキングへと発展させることも可能である。筆者の授業では、こちらで選んで与えた記事の中から、学習者自身が興味を持ったものについて、まず日本語で要約させた後、語句や表現など本文から使いながら英語で要約させる。英語で要約を考える際、学習者が現在習っている英語のネイティブの教員に、記事の内容をどう英語で説明するかを考えるよう言う。要約したものをそれぞれペアに話したり、教室で発表させたりする。

5. 考察

この実践で、写真、ヘッドライン、本文（英語）へと順序を追って導入することで、学生は興味を持続させて、英語のリーディングまで進んだようである。日本人サッカー選手の記事、日本人のノーベル賞受賞の記事、日本人拉致事件など、日本語でその背景知識を持っている記事には興味も覚えるし、内容も理解しやすかったようである。本文の要約の時には、各自必要に応じて辞書を使わせたが、語彙をどう扱うかは悩ましい問題である。読解レベルがかなり高いと思われる学生でも、‘知らない単語があるので意味をとりにくい’、‘英字新聞の英語は今までの英語と違う’と悩んでいるのを見ると、あまり部分（単語）にこだわらず、全体（内容）をつかむような読み方を促すことが必要だと強く感じる。

英字新聞からの記事と、日本語の新聞からそれと同じ内容の記事を同時に学生に読ませ、日

本語でいくつか単語をあげ、それを意味する英語を探すこともさせた。日本語と英語の表現の違いなどを学ぶには、効果があると思われたが、読解レベルの中級から下の学生には難しいようであった。

6. まとめ

Perterson (1992) は教室が「学習コミュニティ」(learning community) としての機能を果たすことが大事だと述べているが、この実践においてペアワークを中心に行い、ペアを超えて情報を交換したり、意見を述べたりすることが自由にできる雰囲気作りにつとめた。英語の読解レベルが低い学生でも、日本語でそれぞれの記事の背景知識をかなり持っていたりするので、学生たちはお互いに触れ合うことで刺激しあい、学習意欲を高めていくと考えられる。

学生達の「文字離れ」が進む中で、授業での読解活動が学生にとって意味があり(meaningful)、楽しく、目的を持って取り組めるようなものにするために、豊富な内容を持った英字新聞はかなり効果的に利用できると考える。今後、もう少し長期間の実践を行い、効果的な利用法をさらに考えていきたい。

参考文献

- Carrell, P. L. & Eisterhold, J. 1988. Schema theory and ESL reading pedagogy. In Carrell, P., Devine, J. and Eskey, D. (eds.), *Interactive approaches to second language reading*, 101-11. Cambridge: Cambridge University Press.
- Freeman, Y. S. & Freeman, D. E. 1992. *Whole Language for Second Language Learners*. Portsmouth, NH: Heinemann.
- Goodman, K. 1986. *What's Whole in Whole Language*. Portsmouth, NH: Heinemann.
- Peterson, R. 1992. *Life in a Crowded Place: Making a Learning Community*. Portsmouth, NH: Heinemann.
- Sanderson, P. 1999. *Using Newspaper in the Classroom*: Cambridge: Cambridge University Press.

- Smith, F. 1988. *Understanding Reading*. Hillsdale, NJ: Lawrence Erlbaum Associates.
- 津田塾大学言語文化研究所読解研究グループ (編). 1992. 『学習者中心の英語読解指導』大修館書店.
- 林仲昭. 2000. 「スキーマを活性化させるリーディング指導」高梨庸雄・卯城祐司 (編) 『英語リーディング辞典』201-219. 研究社.
- 山本敏子. 2000. 「速読指導と多読指導」高梨庸雄・卯城祐司 (編) 『英語リーディング辞典』278-298. 研究社.